

## パウロにおける弱さと力

## ——第二コリント一二・一〇の釈義——

安 納 義 人

## 序 論

本稿は、第二コリント一二・一〇の釈義を通して、パウロの弱さと力の理解を明らかにしようとするものである。パウロ自身が弱さを持つ故に、相手方から使徒としてふさわしくない、使徒たるものほもっと力あるものであるべき、と批難されたとき、彼は弱さと力とは共存することがあっても、何の矛盾も無いのであって、かえって弱さは力の通路となる、と主張する。

このような論争を理解するためには、第一、第二コリントのなかで、コリント信者がどのように弱さと力を理解していたかを知る必要があるし、パウロの反対者が何故、彼を批難するのかを知らねばならない。第一章では、そのような反対者とコリント信者の力と誇りの概念について学び、パウロの誇りが彼らと違う点を明らかにし、また、彼の

用いたテクニクを調べる。第二章では、パウロがパラダイスにまで引き上げられたときの幻と啓示の経験を、どのように用いて相手を納得させようと努力しているかを観察する。ここでパウロは、単純な証しをする者としてではなく、驚くほど知力のある人物であることの幾分かでも知ることができる。第三章では、肉体のとげのいやしを求めた経験をを通して、パウロが相手をどのようにほんろうとしていくかを見ることができる。それから、一〇〜一三章の頂点とも言うべき一二・九aにあらわれた弱さと力の概念を学ぶ。

パウロによれば、現実の人間は、弱さと力、死と生命のパラドックスを避けて生きることができない。この人間理解は、弱さをもって生きる人間に光を与え、また、幅広い適用が期待できるものである。

本稿は次のような構成になっている。

## 第一章 第二コリント人への手紙における誇り

## 一、パウロの反対者の誇り

## 二、コリント信者の誇り

## 三、パウロの誇り

## 四、一二・一〜一〇の構造

## 五、主題の導入の部分（一節）

## 第二章 恍惚の経験と誇り（二〜四節）

## 一、第三の天とパラダイス

## 二、第三人称の用い方

## 三、不思議なことは



じよびな *θεος κωρη* と見なしている」と主張する。そうならば、反対者は、イエスを *θεος κωρη* と見るキリスト論を支持していたのではないか、と思われる。

この節において、ムンクが言うように、パウロは反対者よりも、むしろ、コリント信者が反対者の福音を調べようとせず、ただ外面のみを見て、受け入れてしまったことを批難している。コリント信者は、霊なるキリスト論 *Christology of Pneumatikertum* を愛好している。

5 一一・五。四節と五節はどのような関係にあるのだろうか。五節の「大使徒」は、四節の *ἀποστόλων* と区別されるべきか。それと同一人物を指しているのだろうか。一一・一のアピールは、パウロがコリント教会を真に關心をもっているからであり(二節)、彼らが偽せ使徒を快くこらえているからであり(四節)、彼が反対者とくらべて少しも劣っていないから(五、一三節)である。このような思想の流れから言って、四節と五節の間に飛躍があるとすれば無理である。また、「大使徒」(五節)と「にせ使徒」(一三節)は同一人物と考える方が良い。④ そうすると、大使徒はエルサレムのペテロやその同僚ではなく、皮肉な意味で用いている名称であろう。⑤

6 一二・五~七。パウロは表面的には、自分に与えられた幻と啓示を誇っているように見える。これについては後に学ぶ。

7 一二・一二~一三。ケーゼマンは、一三節の「あの奇蹟と不思議と力あるわざ」は、不思議な奇蹟を指しているが、この句はパウロ書簡のどこにもないので、パウロの反対者のキャッチフレーズではないかと考えられる。④ 彼は、この句を自分たちに適用して、奇蹟こそ彼らの使徒職の保証とと思っている。⑤ しかし、パウロはこれを反対者に負っていると言うよりも、むしろ、コリント信者に負っていると考えた方がもっと適切であろう。彼らは、自らを使徒職を決定する者と自認し、パウロによってキリストが語っておられる証拠を求めている(一三・三)。彼らは、しる

し、すなわち、恍惚の経験、奇蹟、他のカリスマ的な経験を使徒の候補者に要求しているのである。

8 一三・三~九。コリント信者は、自分たちで使徒の基準を決めてパウロを試験している。使徒の基準は、しるしや不思議や力あるわざであり、権威ある推薦状を持っていることであり、知識ももっていることである。これらの基準によって試験されて、反対者たちはコリント教会に受け入れられたのである。

以上のことをまとめると、パウロの反対者の性格は次のようになる。

- (1) 彼らは外部から来た者たちであって、コリント土着の人々ではない。
  - (2) 彼らは、パウロとエルサレムの使徒たちが取りきめた協定の範囲をこえて活動している。
  - (3) 彼らは、ユダヤ主義者と関係している。
  - (4) 彼らは、ユダヤ人だが(一一・二一~二三参照)、コリント信者に割礼を押しつけない。
  - (5) 彼らは、別のイエスと異なった福音を伝える。彼らのキリスト論によると、イエスは *θεος κωρη* である。
  - (6) 彼らは、奇蹟と恍惚を好む。これにしたがって使徒候補者を試験している。
  - (7) 彼らは、にせ使徒、サタンの使い、大使徒とよばれている。
  - (8) 彼らは、パウロとちがって、コリント教会から経済的に支援されている。
- それでは、反対者は誰なのか。フリードリッヒは、いろいろな見解を次のように整理する。⑥ パウロの反対者は、(1)パレスチナのユダヤ人キリスト者である(パウアー、ヴィンディシユ、キヌメルなど)、(2)第一コリントに見られるようなグノーシス主義の人々(リュトゲルト、ブルトマン、シュミタール)、(3)ヘレニスティック・ユダヤ人(ポルンカム、ゲオルゲ、フリードリッヒ自身、多分、バレットもここに入る)。

(1)の見解は、第二コリントの反対者は、割礼、安息日遵守、きよめの儀式に関心を示さないもので、ガラテヤの反対

者とは異っている。(2)の見解も、第二ニコリントの反対者は、第一コリントの反対者の主張するような、いろいろな霊の賜物を扱っていないし、グノーシス的な復活の理解も示さないで、この見解は成立するのかわむずかしい。(3)の見解が次の理由により、もっとも可能性が高い。(a)パウロは第二コリント一・二二で、パウロは反対者と同じようにユダヤ人である、と言っているから、彼らはユダヤ人であることを誇りにしていたにちがいない。(b)啓示や奇蹟によって自分を高揚させるヘレニズム的な性格を示している。(c)彼らは巡回する預言者団や一種の奇術師団に属していると考えられる。それゆえ、彼らは、エルサレムでもコリントでもどこにでも現われ、どこにでも侵入することができた。

## 二、コリント信者の誇り

パウロの反対者を、ユダヤ人であり、カリスマ的経験があり、幻と啓示の経験があり、知識があり、権威のある推薦状をもっている、という理由で受け入れたのはコリント信者である。第一、第二コリントを通して、コリント信者の考え方を概観すると次のようになる。

- (1)コリント信者のある者たちは、*quibus* と *opibus* による思弁的な神学にふけていた。
- (2)彼らは、すでに神の国に入っていると思っていた。復活はすでに起った、と考え、死の恐れは、もう無いと考えた。この誤った考え方をパウロは、主に、第一コリント一五章で批判した。
- (3)コリント市が商業都市で、豊かな町なので、物質的にはコリント信者は現世に満足していた。
- (4)コリント教会には、第一コリント一二章に見られるような、奇蹟やいやしや異言の賜物があり、それらを誇りにしていた。それゆえ、使徒職の候補者にも同じことを要求した。

(5)コリント信者は、多分エルサレム教会からの推薦状をもってきたパウロの反対者を、簡単に受け入れた。これは、彼らが教会の中に、信者の階級をつける傾向があることを暗示している。これらのことをコリント教会は誇りにしていた。

## 三、パウロの誇り

### 1 一二・一〇の位置

侵入した反対者とその影響を受けたコリント信者のため、パウロは、反対者と異なる福音と彼の人格のゆえに、いくつかの批難を浴びることになった。その批難は、コリント教会におけるパウロの使徒職の批判へと続くので、彼は一〇〜一三章で彼の使徒職の弁護をしている。

パウロの反対者は、彼の使徒職と人格とを攻撃する時に、彼の手紙の印象を悪く言い、話しの巧みでないことを嘲笑し、貧弱な宣教師なので経済的支援も辞退しているほどだ、これさえも攻撃の材料にされた。霊の恍惚の状態も経験が乏しい、と言われたらしい。

どのようにパウロはそれらの批難に答えたのであろうか。議論の中でパウロは自分は系図と奉仕については、彼の反対者と同等である、と誇っているが(一一・二一〜二三b)、すぐに奉仕の困難を説明して災難のリストを提示する。これは、自分の誇りの土台は、反対者のそれとまったく別のところにあることを示すための戦術的な切りかえである。すなわち、一一・三〇では「弱さを誇る」と言っている。彼はこの災難のリストをダマスコでの逃亡の話でしめくくる。パウロは城壁の窓からかごで釣りおろされ、言いかえれば、代官の方は堂々と処刑にのり出し、彼の方は小さくなって逃亡したことを意味する。それに一二・一〇が続く。一二・二〜四では恍惚の経験を誇るが、す

ぐさ<sup>24</sup>、一二・七b~一〇をもつて弱さの物語にしてみよう。まったく同じように、一二・一一~一二では、彼の誇りを強気に述べるが、一三・一~四では、キリストの弱さを自分の弱さと同一視している。

このように弱さと誇りをサンドウィッチのように、交互に組み合わせることによって、パウロの誇り (*kauxhōs*) の概念は常に弱さと関係づけられているのに対し、反対者とコリント信者の誇りは、死と命、弱さと力、悩みと喜びなどのパラドックスの明るい面を誇っていることを明らかにしている。使徒職を弁明するパウロの議論は、「弱さを誇る」ことにその基盤を置いているのであって、反対者のようにカリスマ的、霊的自己を誇ることに置いているのではない。一二・一~一〇における主題はこの誇りについてである。

## 2 パウロの誇りとソクラテスの伝統

パウロは *kauxhōdai* と *kauxhōs* を誇りと関連して次のように用いている。(1)パウロと他の者たちが漠然と誇る。一〇・八、一三、一五、一六、一一・一八。(2)一〇・一七では主を誇っている。(3)一〇・三〇、一二・六、九で自分の弱さを誇っている。(4)一一・一六、一七で具体的に自分のことを誇っている。(5)一二・一では、しぶしぶ、あひつりの人について誇っている。

パウロは、一一・二二、二三で、自分自身がヘブル人で、キリストのより良いしもべであると誇るが、その前の一六節で、私は愚かな者として誇ると言っている。また、一一・二一bでも「人があえて誇ろうとすることなら——私は愚かになって言いますが——私もあえて誇りましょう」と訳されているが、ここで使われている *toAukiv* は *kauxhōdai* と等価である。それゆえ、ここでも誇るときは、愚かな者として誇るのである。さらにさかのぼって、すでに一一・一で、「私の少しばかりの愚かさをごらえていただきたいと思えます」と愚かな者として誇ることを開始している。そして、この誇り方は、一二・一一~一三で終るのであるが、その冒頭に「私は愚かな者となりました」。

あなたがたが無理に私をそうしたのです」と言っている。このように見ると一一・一~一二・一三は「愚かな者の説教」(fool's discourse; Narrede) と言える。このようなパウロの誇り方は、正気の人間としてではなく、愚かな者として誇るのであって、これはハンス・ベッツによれば、パウロはソクラテスの伝統にしたがっている。

彼によれば、パウロのディレンマはソクラテスのそれと比較される。すなわち、ソクラテスの対話のように、第二コリント一〇~一三章も「教育的」な対話であり、コリント教会がパウロの反対者によって影響をうけた、と考えるのは、ソクラテスの弟子たちが詭弁家によって驚かされたのに似ている、と考える<sup>25</sup>。真の哲学者にとって貧困と弱さこそ、その主張の真実さの証拠である。だから、真の哲学者は自分自身の業績に言及するべきではなく、もし自分のことを語らなければならない、やむをえない事情があるなら、他の人によって言及してもらわなければならない<sup>26</sup>。もし、どうしても自分の弁明のために自分を語ることが必要なときは、愚かな者のふりをして語ればよい。愚かな者なら、ということで、常人では許されないような主張をしても許されるからである。「私は、何も知らないということを知っている」というソクラテスの自己表現も極端に短縮された形の愚かな者の弁明のひとつである<sup>27</sup>。

パウロは自己弁明の必要に迫られて、ソクラテスの伝統の自己弁明の方法をとった、すなわち、愚かな者として自己弁明をすることによって、コリント信者に自分の使徒性を思い出させようとしたのである。パウロにとってこの方法は、反対者とコリント信者の誇りを引き下げ、自分の強さを愚か者として誇ることによって、自分の誇りを引き上げようとするのに最適であったろう。

## 四、一二・一~一〇の構造

パウロは恍惚と霊の経験が不足しているという反対者の批判に対して、幻と啓示に訴えて弁明している一二・一~

一〇こそ第二コリントの思想のクライマックスと言える。<sup>②</sup>  
 一節 主題への導入

二〜四節 パラダイスへ引き上げられる。

二節 第三の天まで

三節 パラダイスへ

四節 不思議なことは

五〜七a節 2〜4節と7b〜9の橋

七b〜九a 弱さを通して現われる力

七b 肉体のとげ

八〜九a 弱さを通して現われる力

九b〜一〇 弱さを誇る

## 五、主題の導入の部分（一節）

いくつかの読みの中でもともとのテキストは、*Kauchaḥthai dei* *oἰ συμπέρον μὲν, ἐλεῖσθαι δὲ εἰς ὀντασίας καὶ ὀντασίας λυπεῖς κυρίων*。ではなにかと考えられる。<sup>③</sup> 一節の *kauchaḥthai dei* は *καυχᾶσθαι* 二・三〇〇 “Ei *kāucha-*とを誇る前に、パウロは二・三二でダマスコからの逃亡のことについて触れ、自らを卑下している。二・二二〜二三でパウロは反対者の誇りにあわせて、自分もヘブル人であることを語ったように、二・二一でも反対者の幻と

啓示の誇りにあわせて、しぶしぶながら、自分を誇りはじめる。<sup>④</sup>

しかし、そのような幻と啓示は役に立たない (*oἰ συμπερον*)。動詞 *συμπερον* と形容詞 *συμπερονος* は、クリスチャン個人にとって、教会にとっての有用さを意味する。<sup>⑤</sup> パウロは二・二一で幻について語っても無益であると言っているが、自分自身を誇ることは自分に無益であるばかりか、コリント教会のためにも無益であると言っている。この誇りは教会の徳を高める方法ではない。

ある学者は幻と啓示を二つの別のものを指しているとする。幻は見る経験を指し、啓示は聞く経験を指しているとか、幻は主観的経験であって、啓示は客観的経験である、と考えている。しかし、これら二つのことばは密接な関係があつて分離したい、と考える方がもっともらしい。<sup>⑥</sup> キリシヤ語 *kyriou* は subjective Genitive か objective Genitive か、どちらでもあろうか。ブルトマンは明確にこの二つを分離することはむずかしい、という立場をとるが、それよりも反対者が主を見たかどうかを問題にしているのであるから、*kyriou* はおそらく objective Genitive とする方が適当であろう。<sup>⑦</sup>

## 第二章 恍惚の経験と誇り

### 一、第三の天とパラダイス

パウロが説明する幻の経験は、第三の天（二節）とパラダイス（四節）に引き上げられたことからできている。ある学者は、これを二つの異なった経験と理解するが、第三の天とパラダイスは同じ場所を指していると考えの方がよい。<sup>⑧</sup> ユダヤの伝承はしばしば七層の天について言及しているが、パウロが親しんでいた伝承は三層の天だったらし

い。<sup>⑤</sup>第二エノク八・七、モーゼの黙示録三七・五、レビの契約二・九〜一〇、はパラダイスは第三の天に位置している、と言っている。さらに、二節と三〜四節の間には次のような並行関係が見られる。

- |                                     |  |                                       |
|-------------------------------------|--|---------------------------------------|
| I                                   |  | II                                    |
| a) οἶδα ἄνθρωπον ἐν χριστῷ          |  | a) καὶ οἶδα τὸν τοιοῦτον ἄνθρωπον...  |
| b) πρὸ ἐπιου δεκαετασάβων           |  | b) .....                              |
| c) εἶτε ἐν σώματι οὐκ οἶδα          |  | c) εἶτε ἐν σώματι                     |
| d) εἶτε ἔκτος τοῦ σώματος οὐκ οἶδα, |  | d) εἶτε χωρὶς τοῦ σώματος οὐκ οἶδα    |
| e) ὁ θεὸς οἶδεν.....                |  | e) ὁ θεὸς οἶδεν—                      |
| f) ἀπαγγέλλεται τοῦ τοιοῦτου        |  | f) ὅτι ἠπράτη                         |
| g) ἕως τρίτου οὐρανοῦ               |  | g) εἰς τὸν παράδεισον                 |
| h) .....                            |  | h) καὶ ἤκουσεν ἀγγεῖα πημάτων, ἃ κτλ. |

パウロは第三の天まで (ἕως) 引き上げられ、パラダイスで (εἰς) 不思議なことを聞く。そうするとパラダイスは第三の天の一部なのか、上の二つは同一のものなのか問題であるが、ἕως は、第三の天が恍惚の旅の終点であり、εἰς はそこに着いたことを示すように用いられており、ちよつとどこで不思議なことを聞いた、と理解するのが妥当であろう。<sup>⑥</sup>

その経験では、パウロは自分自身から離れ、身体の正常な感覚を失ってしまったので、肉体のままであったのか、

肉体を離れてであったのか、わからないほどであった。彼が意識したのは、第三の天にまで引き上げられたことは、聞いたことに集中しており、肉体の感覚を何も覚えなかった。この種の正常な感覚の喪失は恍惚経験の明らかな証拠である。そのような「肉体を離れて」の経験は、神秘的な伝統の中ではよく知られている（プラト、リパブリック、一〇・一三、フィロン、De Migr. Abr. 34f; De Spec. Leg. III: 1f、シャーマニズムなど）<sup>⑦</sup>。

パウロが「肉体を離れてかどうか私は知らない」と言ったのは、反対者やコリント信者の見解をよく知った上で、注意深く計算された陳述である。<sup>⑧</sup> 反対者は *θεῖος τῆς ψυχῆς* キリスト論を主張し、トローラーを見つめるとき、顔が栄化され、神秘的な力と生命によって肉体も変容すると信じていた。当然の結果として、彼らは弱さをもつパウロを、御霊が肉体に作用していないと批判できたのである。ラビの伝承では、幻の経験のときは神の力に触れ、ラビ達はパラダイスへ肉体のまま天に引きあげられた、とされていた。<sup>⑨</sup> 一方、コリント信者は、グノーシスの影響を受け、恍惚の瞬間には魂は肉体から抜け出す、と理解していた。パウロの陳述はこの二つの間をどちらにも偏らないようにねらった巧妙なものである。<sup>⑩</sup> すなわち、パウロは彼が肉体のままであったかどうかを、自分は知らず、神がご存知である、と述べたのである。パウロの反対者やグノーシス的なコリント信者にとって、経験の真实性は、肉体のままか、肉体を離れてかにかかっていたが、パウロはそれを神に依存している、と片付けてしまった。もし、そのような恍惚の経験が使徒職の基準として必要ならば、パウロはそのような経験を与えたのは神である。誇りの対象となるのは神のみであって、「誇り者は主にあって誇りなれむ」（一〇・一七）ということになる。

さらにパウロは、「あるひとりの人」を「キリストにある」と限定している。神秘主義の人々とちがって、あるひとりの人は、すでにキリストにあるのであるから、パラダイスの経験は救いには無関係であることを暗示している。「キリストにある」というパウロの慣用語を用いて、使徒の基本的条件は、キリストと個人的な関係であることを表

現している。<sup>42</sup>「キリストにある」者は、キリストなしに誇ることはできず、誇る者は主にあって誇る、ということになる。

パウロも彼の反対者も恍惚の経験をもっている。第一コリント一四・六、二六で、パウロは黙示を教会の中の御霊の働きのひとつとして挙げている。幻と啓示とは主からのものとして、異なったものとは考えられないから、幻の経験はパウロばかりでなく、コリント信者の間でもむしろ一般的であった。ただ、二者間の相異は、一方は使徒の条件として請求したのに反し、他方はこれを重視しなかった。

## 二、第三人称の用い方

パウロはこの第三の天、パラダイスの経験をした人を自分とは呼ばず、「あるひとりの人」(二節)とか「この人」(三節) というように第三人称をあてている。しかし、七節が明らかにしているように、パウロ自身のことを語っている。リンドブロムは、そのような「私」の客観化の現象は、幻の経験の描写に用いることはよく知られている、と説明している。<sup>43</sup>そればかりか、「私」の客観化は、神秘的な恍惚の経験の典型的な描写と言える。<sup>44</sup>それだけではなく、もしパウロがソクラテスの伝統に従うなら、自分自身を誇るわけにはいかないし、どうしても自分を誇るときは他の誰かに誇ってもらうほかない。パウロが第三人称を用いたのは、このへんにも理由があるのである。<sup>45</sup>パウロは自分のことを誇らず、第三の人物を「キリストあるひとりの人」と「この人」と「このような人」と呼んで誇る形をとった。この方法で、パウロは反対者と異なって、自分自身の経験を宣伝の材料として用いることを避けたのである。<sup>46</sup>

## 三、不思議なことば

パラダイスの経験は、四節のことばで締めくくられている。パウロは何を見たのかを語らず、その沈黙を四節の不思議なことばの性格のせいに行っている。

四節のことばは、他の神秘的な宗教と平行している。アプレイウスは「もし、語ることが許されれば私は語ろう。もし、あなたが聞くことが許されれば、あなたは聞こう。しかし、私の舌もあなたの耳もともどもに痛みを覚えよう」(変貌一一・二三)。<sup>47</sup>その他フィロン、Leg. Alleg. 2: 57)。このようなことばは、他の世界の経験をこの世界のことばに置きかえることは不可能であることを意味している。もっとも大切な神的な交わりは言語によらず、理性によらない。これは神秘的な恍惚の経験の特徴である。<sup>48</sup>このようにパウロの経験の記述は、反対者のよく知っている形式によくあっている。

しかしパウロはその意味をひねっている。*ἀπῆτος* という語は、もともとは「表現不可能」という意味であるが、「物理的に表現することが不可能」という意味と「禁止によって表現することが不可能」との二つの意味がある。<sup>49</sup>パウロの反対者が「すばらしくて、人間には到底表現できない」という神秘的宗教のことばとして受けとることを予想して、パウロは *ἄκωκυτος* と *ἀκαθίστος* と *ἀπίστατος* を組みあわせて、「禁止によって表現不可能」という意味を含ませたのである。パラダイスで聞いたことは、明らかにすることが禁止されている、と言っているのである。それゆえ、パウロが天のことばについて報告できないのは、禁止されているからなのである。何という皮肉(一)。パウロの幻と啓示の証しは、その内容については何の報告もしていない。神が禁止したからである。結局、幻の経験は、幻がなく、啓示の経験は何の啓示もなく、それらは *ἀπῆτος* ということばの二重の意味によって正当化されたのである。

この方法はコリント信者にパラダイスの経験さえも、使徒の条件の真実な証拠となることは出来ないことを教える